調査研究から③

作品紹介 小倉遊亀《花　其二》

昭和九年、再興第二十一回院展出品、京都大学人文科学研究所蔵

國賀由美子

京都大学人文科学研究所（以降、人文研と略称させていただく）の高木博志さんから電話を頂いたのは、今年の四月になって早々だったと記憶している。ちょうど兵庫県立美術館の「没後十年 小倉遊亀展」会期が終了し、次の巡回先、宇都宮美術館のオープンを控えている時期であった。同研究所に、小倉遊亀（1895～2000）の若い時期の静物画があるので、一度見てほしいとのこと。「若い時期」「静物画」で、咄嗟にある作品が頭に浮かぶ。そうだったらいいなと思いながら資料を準備して、実見がかなう日を待った。

四月二〇日の午後、人文研本館二階の図書室に、その作品は置かれていた。希望でもあった予感は的中。昭和九年（一九三四）の再興第二十一回院展に二点組で出品され、その後行方のわからなかった「花　其一」「花　其二」のうちの「花　其二」である。行方のわからなかったというのは、いささか手前勝手の横暴な言い回しで、私どもこれまでに遊亀さんの展覧会を立ち上げた経験のある者にとって、所在を確認することができなかった、という意味合いである。戦前期の、秋の院展出品作に静物画はほかになく、これまでにもどんな作品だろうと気になっていたが、『日本美術院百年史』などに載る小さなモノクロ図版以外にこの作品を知る術はなかった。

小倉遊亀〈花　其二〉昭和9年（1934）　再興第21回院展　絹本著色　75.5×97.2㎝

間近に寄って、見せていただく。紫陽花、水仙、百日草など種々の草花が、今しがた庭ばさみで切り取られたまま無造作に積み重ねられたようで、いまだ息吹が聞こえそうなほど植物の生命感が伝わってくる。絹本で細やかな描写。バックには何も描かずに余白のみとする。師の安田靫彦は遊亀入門の時「見た感じを逃さぬように心掛けてゆけば、その都度違う表現となっていつの間にか一枚の葉っぱが手に入りますよ。一枚の葉っぱが手に入ったら、宇宙全体手に入ります」と諭してくれた。この師の言葉に真っ直ぐに応えた作品である。画面左下には昭和十年前後の作にしばしば見られる朱文方印「游亀」を捺す。

この作品を院展に出品した二年前の昭和七年六月に、小倉（当時は溝上）遊亀は、女性初の日本美術院同人となっていた。長らく秋の院展には人物画を出品し続け、同人となった後も同年の「苺」、翌八年の「浴後のひと」と、大作は人物画と決めていた感がある。回を重ねる毎に優作を見せる新同人として、識者の注目を浴びる一方で、しかしこの時期の遊亀は、暮らしを立てるための教員生活、病を得た母の看病と、作画に専心できない大きな悩みを抱えていた。翌九年の院展には静物画二点としたのも、そのような事情が反映しているのかもしれない。

しかし静物画の清新さこそ、かえって批評家に訴えかけるものがあった。「京都に於ける日本畫史」などの著作がある、美術記者でもあった評論家神崎憲一はこの作品を評価し、「繊細な女らしい神経の働きと手先の器用さがはつきり出されてる」「他奇もない構図であるのに何とも言へない品のいゝデリカシーが放射されて、男ぢや及び得ない味かも知れないなァ、と感じさせるものがある」と賛辞を寄せている（『塔影』十巻十号、昭和九年十月）。

作品裏面に転じると、ラベルと、チョークによるものらしい白い文字が目に入った。ラベルには「溝上遊亀67内ノ大キナ方」と黒い文字、異筆らしい「一九」の青みがかった文字が読める。チョークの白文字は「西洋文化研究所」である。

水野直樹人文研所長のご教示によると、西洋文化研究所とは人文研の前身の名称。さらに敗戦で改称した西洋文化研究所の前身、社団法人獨逸文化研究所が創始された年が、昭和九年ということである。人文研にはほかに、この年の帝展出品作である池上秀畝「秋日和」と、やはり同年の院展、彫塑に一般入選した森英之進「軍鶏」が所蔵されることが、近時同研究所の高階絵里加さんの調査でわかった。獨逸文化研究所の草創には、京大教授陣のほか学者や実業家がその実現に奔走し、竹内栖鳳や高島屋の飯田新七、朝日新聞社の上野精一や、第二代理事長ともなった下郷伝平らの関与が確認される。「花　其二」をはじめこれらの作品がいかにして人文研の所有に帰したかは、今後に委ねるしかないが、同研究所草創への餞（はなむけ）として、社団への財産寄附を入社の条件とする社員の誰かが介在し贈られたと想像するのは、許されるのではなかろうか。

現在のこの作品は、おそらく濃厚すぎた膠によって、画面が痛々しい状況を呈していると言わざるをえず、保全のため展示公開は厳しいだろう。いずれの日か修復が実現しコンディションが回復したおりには、この戦前期の静物画の代表作を加えて、小倉遊亀の画業をより精緻に通覧する機会ができることを、切に待ち望んでいる。

（滋賀県立近代美術館主任学芸員）